

Title	シリーズ「人体における内視鏡の世界」を終えて
Author(s)	吉野, 肇一
Journal	歯科学報, 101(4): 344-345
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/359">http://hdl.handle.net/10130/359</a>
Right	

## 教育ノート

## シリーズ「人体における内視鏡の世界」を終えて

モデュレーター 吉野 肇一

東京歯科大学外科学講座非常勤講師  
慶應義塾大学看護医療学部教授

東京歯科大学学会の機関誌である「歯科学報」の100巻4号(2000年4月)から始めさせていただいたこのシリーズは、関係各位のご協力を得て、予定された13稿がほぼ順調に進み、おかげさまで今回をもって終わることができた。

この1年有余の間に掲載された内容は次のようになる。

はじめに	100巻4号(2000年4月)
1 歯科・口腔外科	" 4号(2000年4月)
2 消化管	" 5号( " 5月)
3 呼吸器	" 6号( " 6月)
4 脳神経	" 7号( " 7月)
5 耳鼻咽喉	" 8号( " 8月)
6 乳腺	" 9号( " 9月)
7 泌尿器	" 10号( " 10月)
8 女性生殖器	" 11号( " 11月)
9 脊椎	" 12号( " 12月)
10 関節	101巻1号(2001年1月)
11 血管	" 2号( " 2月)
12 胸腔	" 3号( " 3月)
13 腹腔	" 4号( " 4月)
おわりに(本稿)	" 4号( " 4月)

「はじめに」でお断りしたとおり、それぞれの担当者がいづれも現在、自ら第一線で内視鏡を施行しているとはいえ、彼らの年代がベテランから中堅とさまざまで、その点、読者にとられては若干の違和感を持たれたかもしれない。しかし、担当者が日常診療上、ルーチンに内視鏡を施行していることから派生する迫力は感じていただけないのではないであろうか。モデュレーターとしては、「分かりやすく現況を紹介する」ということを最も重要と考えて、担当者にもかなりの無理を言って、編集させていただいた結果がこれであり、その意味では大いに満足している。

侵襲をできるだけ小さくすることが、医療では永遠に求められる。そこにおいて内視鏡が持つ意義はきわめて大きい。

従来は、診断の道具として意味が大きかった内視鏡は、今後はその位置を保ちながら、治療の道具とし

での位置を飛躍的に伸ばすであろう。つい10年前までは、胆石のために胆嚢摘除を行うと職場復帰まで平均2週間を要したものが、現在では内視鏡のおかげでわずか数日で職場復帰が可能となった。これは、ほんの一例に過ぎない。腹部外科手術全体では、現在すでに30%以上が内視鏡によるものになっている。

侵襲軽減という点でのもう一つの興味点は、内視鏡自身による侵襲の軽減である。「胃カメラ<sup>脚注</sup>検査を受けてください」などといわれると、誰でもがしり込みをしたくなる。しかし、この方面でもブレイクスルーが起こりつつある。すなわち、小さいカプセルを飲むことによって全消化管の観察を行うというものである。このカプセルには微小 CCD カメラをはじめとする IC 機器が積み込まれていて、そこからの画像を体外に送り出す。これがさらに進めば、体外からこの小カプセルを操作することによるいわゆるロボット手術が可能となり、まさに「マイクロの世界」に近づく。

ということで、ここまでは内視鏡の良い面ばかりを挙げてきた。何事もそうであるが、非常に良い面があれば、必ずと言っていいほどきわめて悪い面もある。上述の胆嚢摘除で言えば、腹腔鏡手術の最初の場面で腹壁に穴をあける際、大血管が損傷されて死に至った例など、従来の開腹術では考えられないようなことも起こり得るということを読者に伝えることも、本シリーズのモデレーターとしての私の使命であろう。このように従来考えられなかったことが起こるといことは、表現が必ずしも適当とは言い難いが、最近頻発しているコンピュータミスの原因とした大学入試合否判定ミスと相通じているところが多いといえよう。

いずれにせよ、今後、すべての分野で内視鏡が発展することは明らかである。われわれは、その長所と短所を十分に認識して、それを医療に活用しなくてはならない。

シリーズを終わるにあたりまして、私たち東京歯科大学市川総合病院で内視鏡を行っている者たちに、このような機会を与えてくださいました関係各位に深甚の謝意を表します。また、私が本シリーズ連載途中に母校の慶應義塾大学へ戻るなどのこともありまして私の編集作業に時間がかかるなど、多くのご負担を担っていただいた「歯科学報」編集部各位に心からお礼を申し上げます。浜松市ご在住の水川秀海先生よりは、胃カメラ誕生に関する貴重な資料とお励ましを頂戴しましたことも付記させていただきます。誠にありがとうございました。

了

---

#### 脚注

胃カメラについて：胃内視鏡は、かつては、その先端に小さいカメラを装着していたので、「胃カメラ」と呼ばれ、この名称が使いやすさもあり、人口に広く膾炙した。その後、光ファイバーの発達により、胃内視鏡はファイバースコープの時代となり、健康保険上もそのような名称が使われている。しかし、また、最近ではその先端に微小の CCD カメラを付けた電子内視鏡が主流となっている。そのため、ここでは「胃カメラ」とした。